

「ありがとうの連鎖」

喜多直美（第一三共株式会社 東京支店 城東第一営業所）

認知症。

この言葉を、最近テレビや雑誌等でよく目にする。認知症とは、いったん正常に発達した知的機能が持続的に低下し、複数の認知障害がおこるために社会生活に支障をきたすようになった状態をいう。今や、65歳以上の10人に1人が認知症である。この認知症の治療に、私は小さな錠剤を通して関わる事ができている。認知症を完全に治す薬は、まだない。しかし、認知機能の低下を抑制する薬はある。認知症の方とその家族に少しでも以前の生活を取り戻し、その人らしい時間やご家族との大切な時間を過ごして頂きたいと、私は考えている。

この認知症治療薬をA医師に紹介しご処方頂いている中、大変心温まる出来事があった。

認知症をはじめとする精神疾患を診療している精神科での話である。認知症の方は、60歳代の既婚女性で、旦那様と大変仲が良い。2年程前から認知症を患い、徐々に認知機能が低下していった。それに伴い、服装や化粧にも興味がなくなったという。当初服用していた治療薬では、認知機能の低下を抑制することは出来ないとのことで、当社治療薬の服用を開始した。開始から1ヶ月が経過した頃、旦那様から嬉しい報告がA医師にあったという。

「妻が私に、『眉毛を描いてほしい』と頼んできた。」

私はその認知症である奥様にも、旦那様にもお会いしたことはない。しかし、A医師に旦那様が報告している嬉しそうな顔を私は想像できた。これまで旦那様の前で一人の「女性」であった奥様が、服装や化粧に興味がなくなった。それは患者さん本人にとっても、旦那様にとっても悲しく辛い現実である。それが、小さな錠剤一つによって、以前の「女性らしさ」を取り戻すことが出来た。

本当に些細な変化でもいい。この状態をどれだけの期間、維持出来るかも分からない。ただ、少しでも患者さんやその周りにいる人に笑顔が戻る事、それがこの仕事のやりがいである。更に、旦那様は、A医師にこう言った。

「先生、ありがとう。」と。

認知症治療薬に携わるようになり、私がMR活動でより心がけていることがある。それは、MRは医師に自社製品を処方してもらうことで満足してはいけない。処方して頂いた後、処方された認知症の方とご家族の様子がどうなったかを医師と共有する。共有し、認知症の方、家族、介護者や医師にとって思い通りの治療が出来たことを知って、初めて私はやりがいを感じる。

これにより、これまでのMR活動ではなかなか得ることができなかった多くの「ありがとう」に出会う事ができている。その他にも、「食事中、2分も椅子に座れなかった祖母が、服用を初めて2週間頃から落ち着いて食事をとることができた。まともに食事をとってくれたから、大変安心した。」「孫のことを‘どこかの子’との認識であった祖父が、孫を認識して名前を呼んでくれた。涙が出た。嬉しかった。」「毎日、怒って壁に頭をぶつけたり、怒鳴りながら物を投げて

いた夫が、服用してから7日間全くそのようなことをしなかった。夫は落ち着き、穏やかな表情になり、夫との会話が楽しくなった。」

これらは実際に、医師から頂いた、認知症の方とその家族や介護者の声である。当社治療薬の反響に直接触れることができる、これはMRの醍醐味である。

この反響をしっかりと会社にフィードバックすること、これもMRの仕事であると、私は考える。

このように、患者さんから医療従事者へ、医療従事者からMRへ、そして、MRから素晴らしい製品を生み出す会社へと、「ありがとう」を連鎖できる、そんなMRに私はなりたい。そのためには、常に意識している「患者さんのために」という、ぶれることのない軸を持ち続けたい。